



新年明けまして
おめでとうございます。



あさつゆを発展させる二つの柱

あさつゆ運営組合長 伊藤良夫

新年おめでとうございます。昨年中は出荷者皆様の御協力であさつゆもさらに一回り大きく成長し、数年来の念願であった売上2億円の大台にも乗せることが出来ました。心より感謝申し上げます。

さて、今年にあさつゆがオープンして、まる5年目を迎えます。5周年という記念すべき年にいかにして、あさつゆをさらに発展させるか？ このことは生産者の皆様にとっても大きな関心事だと思います。そこでこの場を借りて、あさつゆをさらに発展させる方策について、私の考え方を記してみます。

端的に言いますと、あさつゆを発展させる上で重要な二つの柱があると思います。

あさつゆは地域の皆さんに新鮮な地場産を日々安定して供給するという最も基本的な任務を負っています。そのために重要なことは、日常的に消費される基本的な野菜、くだもの、穀類、花、加工品などを安定的に、可能な限り長期間、しかも十分に供給するという役割です。この役割を果たせる直売所になることは、あさつゆが一人前の直売所として認められるために、どうしても乗り越えなくてはならない課題だと言えます。小規模の直売所と決定的に違うところは、この基本的な力を持てるかどうかだと思います。これがあさつゆを発展させる一つの柱です。

しかし、あさつゆが普通の小売店では考えられないような規模で支持を得る為には、まだ足りないものがあります。それは、一言で言えば、“直売所にしかない魅力”です。直売所ならではの商品、あるいは直売所だからこそできる売り方、お客さんが「こんな商品は直売所にしかない」と認めてくれ、そして「だから私は、直売所で買いたい」と思わせるような商品と売り方を作れるかどうかです。

今までもあさつゆでは、生産者の皆さんの創意あふれる商品と売り方でお客さんの心をつかんできました。今後はさらに、“意識的に”この魅力を追求し、創意あふれる商品と売り方をつくり出す必要があります。これがあさつゆを発展させる第二の柱です。

あさつゆは、これまでの数字をみれば順調に進んできたように見えますが、決して平坦な道ではありませんでした。その影には、日々出荷することに執念をもって取り組んだ生産者の皆さんの努力や、悪天候や病害虫と闘い続け、悩んだ日々がありました。そして職員の皆さんは、年間何回もある販売セールやイベントを責任感と目標数字をもって取り組み、苦闘しながら達成してきました。決して、順風満帆の平坦な道ではありませんでした。これまでも、今年も来年も、そして再来年も、あさつゆを発展させることは常に容易なことではありません。

しかし、200人をこえる生産者の皆さんと職員の皆さんが力を合わせ、創意をもって取り組めば、必ずやあさつゆを発展させることが出来るはずです。

食をまもることは、命を守ることであり、その仕事についていることの誇りを心に刻み、今年も皆さんと歩みを進めたいと思います。本年が皆さんにとってご多幸の年であることを祈念して、新年のごあいさつと致します。

平成 21年 元旦



野菜の作業

種まき	栽培管理のポイント
<p>ハウス育苗型春レタス ・標高 500m で 4 月下旬 ~ 5 月上旬頃に収穫する作型では今月が播種期です。</p> <p>冬まきパセリー ・播種後十分に灌水をし、温度を 20 前後で管理。(25 以上にしない) ・発芽後は日中 20 夜間 10 を目安に管理。 ・本葉 3 ~ 4 枚で間引きをします。</p>	<p>・ハウレンソウのハウス栽培における温度管理とべと病対策 直売所にとってハウレンソウは、葉物類の少ない寒い時期は重要な品目となっており、組合員の皆さんもハウスなどの施設を使い少しでも長期的・安定的に出荷したいと努力されている方も大勢いらっしゃると思います。 ハウレンソウは、比較的低温を好み生育適温は 15~20 であり、10 前後まで良く生育します。また低温に強く 0 以下でも枯死せず一時的には -10 にも耐えます。しかし、冬期間は保温を意識しすぎるあまり、換気が不十分となり、日中ハウス内の温度や湿度が上昇しすぎ、葉の軟弱化や病害が発生しやすくなるので、天気の良い日中には出来るだけ換気を行い温度調整をするとともに湿度が上がりに過ぎないように管理をすることが大切です、二重被覆等をしている場合も、日中は被覆をはいで日光に当てることも重要です。また、密植による通気不良とならないよう間引きの徹底やかん水時の泥の跳ね上げ防止も重要なポイントとなります。さらには、抵抗性品種の利用や必要に応じては薬剤による予防防除なども行い出来れば発生させないことが重要です。</p> 



農業豆知識

野菜の新しい品目・作型の紹介 (カブの品種と栽培方法)



カブは、古事記や日本書紀に記載があるなど古い野菜の一つで、各地に様々な品種があり、地上部・地下部とも利用できるなど直売所向けの野菜です。わが国の栽培品種は東洋系品種郡と西洋系品種郡及びその両系の交雑系郡に大別され、東洋系は葉が立性で毛じがなく、根は球形のものが多く、主用品種には天王寺カブ、聖護院カブなどがあります。

欧州系は葉が開張性で毛じを有し、切葉のものが多く、低温感応が鈍く花芽分化、抽だいは遅くなります。主要品種には小カブや札幌紫カブなどがあり、小カブは多くの系統に分化しそれらも品種として扱われています。

聖護院カブ(右)と小カブ

近年、品質に優れた特徴のある一代交雑種の育成が進み F1 品種の栽培が主流となっています。また、根こぶ病抵抗性品種も育成されており、栽培面では活用すると有効です。

栽培特性としては、発芽・生育適温は、15~20 と考えられており 25 以上の高温では生育が悪くなり、病害も多くなる傾向にあります。本県では、春~秋栽培が中心で、播種は耐寒性・抽だいの点から 4 月以降から 8 月下旬までとします。

栽培については、軽量品目のため比較的ほ場条件の悪いところへも導入可能であるが、アブラナ科野菜との輪作は避けます。

耕土は特に深くなくてもよいが、土壌の物理性が品質や収量に影響するので完熟堆肥や土壌改良剤などを施用し、通気性・保水性のよい土作りを行いましょ。

播種は、幅 120~170cm の播種床を作り条間 15~20cm で条まき又は点ばで行うが、間引き労力を考え播種機やシードテープの利用も進んでいます。

間引きは 1~2 回とし、本葉 2~3 枚時、4~5 枚時にそれぞれ行い株間 10~15cm になるように行います。かん水により生育は促進されますが、生育ステージで効果に差があり特に生育後半での効果が大きいです。病害虫ではダイコンと同様の防除となりますが、カブは葉も商品になることから葉の防除も必要で、特にコナガ防除が重要であり、発生が多い場合は白寒冷しゃの利用も考えます。

収穫は品種毎の目的の大きさになったものから間引き収穫するが、小カブで 5~6cm、中カブは 10cm 程度を目安に行います。



耐病ひかり(タキイ種苗)

あさつゆ連絡先 電話:FAX 41-1062

技術事項作成協力：上小農業改良普及センター
地域生活係 中澤普及員(25-7156)